頭脳循環プロジェクト・第２回個別セミナー
共催　2011 年度第９回中国近世近代史研究会

日時　　2012 年 3 月 3 日（土）13 時 30 分～
場所　　文学部棟１階　　文学部長室
報告者
　秦兆雄氏（神戸市外国語大学教授）
　「中国城郷差別的回顧与展望（中国の都市農村格差への回顧と展望）」
柳静我氏（日本学術振興会外国人特別研究員）
　「18 世紀のチベット政策からみる清朝統治の多元性」
　申斌氏（大阪市立大学大学院文学研究科）
　「数量化・規範化・中央化：明代山東における地方政府の徭役管理の歩み」

概要
　本研究会では３名の研究者に報告していただいた。
　人類学者秦兆雄先生は都市と農村の間の格差について論じられた。人類学のジャンルでは中国人を漢族と少数民族という視点から区別しがちだが、格差という点からもっとも重要なのは、都市戸口と農村戸口に分ける戸籍制度の存在であるとし、中国都市の歴史を概観したうえで、現代中国の戸口制度、都市と農村の格差、収奪文明から環流文明への実現について論じた。
　柳静我氏は清朝の対チベット政策に焦点を当てている。この問題を考察するに際しては、大きな構造論よりも、清朝の政策立案者と決定者の認識と解決法の方策に注目することが重要であるとして、雍正時代の政策の細部にまで踏み込んで検討を加え、清朝の辺彊政策の内実を明らかにした。
　申斌氏は、明朝の財政の仕組みを数量化の視点より議論した。とくに『山東経会録』を主要史料として、銀納化にともなう地方政府の自己管理領域の鮮明化、税役の数量把握、計画的な財政の登場といった重要な見解を提示した。
　このうち、秦兆雄氏の報告は人類学の観点より現代の都市問題を扱ったものである。柳氏、申氏は直接都市を取り上げたわけではないもの、柳氏の場合、辺境の都市に対する国家の政策、申氏の場合には、国家の徴税システムのなかでの都市の位置づけ、といった新たな研究課題に結びつくものである。